

3	学校名 住田町立世田米小学校 外 4 校	H29～R3
---	----------------------	--------

## 令和 3 年度研究開発実施報告書（要約）

### 1 研究開発課題

子どもたちに新しい時代を切り拓くために必要な資質・能力や心の豊かさを育成するため、小・中・高等学校の滑らかな教育の接続を活かして、新たに教科「地域創造学」を新設した場合の教育課程、指導方法及び評価方法等の在り方に関する研究開発

### 2 研究の概要（別紙 1：研究の概要図）

#### （1）研究の目的

岩手県の中山間部に位置し、豊かな自然に恵まれた住田町は、人材の流出、地域の疲弊・衰退への不安という課題に直面してきた。町及び教育行政はこれらの課題に向き合い、中・長期的な展望に立った施策展開を急務と捉えている。人材育成は将来にわたって持続可能な町の姿を描く上で最重要課題であり、町民の寄せる期待も大きい。

本研究開発は、町教育研究所を母体とし、町内全小・中学校及び県立高校で連携し、新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力を身に付け、他者と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することのできる人材の育成を目指し、取り組むものである。この目的を達成するため、小学校から高等学校まで一貫して新設教科「地域創造学」を中核に据えた教育課程を実施する。これまで以上に、本町の学校教育を通して育む社会的実践力や、子どもの成長についての展望を地域と共有しながら、保護者や地域の関係者の参画を積極的に位置付けることにより、子どもたちの資質・能力の育成とともに、地域の活性化につながるものであると捉えている。

#### （2）研究の概要

本町の教育振興基本計画基本目標「生涯学び続け、新しい時代を切り拓く心豊かな人材の育成」の基に、自立して生き抜く力を身に付け、他者と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することのできる人材の育成を目指して、新設教科「地域創造学」を中核に据え、小学校から高等学校まで一貫した 1 2 年間の教育課程と指導方法、評価方法等の開発を行う。具体的には以下大きく 3 点について、具体的な研究実践をとおして提言を行う。

- 「社会的実践力」を育むため「地域創造学」を据えた教育課程の編成をすること
- 「社会的実践力」を効果的に育む指導方法を探ること
- 「社会的実践力」を評価するための具体的指標の開発を行うこと

#### （3）研究仮説

新設教科「地域創造学」において、小学校から高等学校までが、目指す資質・能力「社会を創造していくことのできる力（社会的実践力）」を共通に目指し、以下の手立てを講ずることにより、新しい時代を切り拓く心豊かな人材を育成することができるであろう。

そのために具体的な手立てとして、以下の 5 点に取り組む。

- ① 新しい時代を切り拓くために必要とされる資質・能力（社会的実践力）の規定
- ② 社会的実践力を育成するための教育課程の編成や効果的な指導方法の開発
- ③ 社会的実践力の育成を評価するための具体的指標の開発
- ④ 教育課程の特例による教科「地域創造学」の創設と授業実践
- ⑤ 新設「地域創造学」に関するアンケート調査や外部評価の効果的な活用と教育課程等の在り方の検証

(4) 教育課程の特例

- ① 小学校では、生活科、特別の教科道徳、外国語活動及び総合的な学習の時間を減じて、全学年において「地域創造学」を1学年106時間、2学年110時間、3・4・5・6学年では85時間設定した。
- ② 中学校では、全学年において、特別の教科道徳、外国語及び総合的な学習の時間を減じて「地域創造学」を1年生では62時間、2、3学年では82時間設定した。
- ③ 高等学校では、全学年において総合的な探究の時間を減じて、「地域創造学」を1単位35時間設定した。

3 研究開発の経緯

(1) 研究の経過

	実施内容等
第一年次	<p>(1) 新設教科「地域創造学」新設の準備</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 小中高12年間の系統的教育課程の研究</li> <li>② 育成したい資質・能力を現在の学校や地域の抱える課題と照らし合わせて明確化</li> <li>③ 育成したい資質・能力と教科の内容、指導と評価方法の在り方についての検討、新設教科と既存教科との関連を確認</li> <li>④ 新設教科の目標の修正</li> <li>⑤ 新設教科の評価規準作成と評価方法の研究（試案の作成）</li> </ul> <p>(2) 小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 研究内容、研究方法の明確化と共通理解</li> <li>② 新設教科と既存の教科の関係性をより明確にするための分析</li> <li>③ 育成したい資質・能力の育成に向けて、意欲的に授業に取り組みせる指導方法の工夫・改善</li> </ul> <p>(3) 社会的実践力の把握と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査</li> <li>② 各種調査（全国学力・学習状況調査や心理尺度等）との関連についての分析及び今後の検証に向けての評価準備</li> </ul> <p>(4) 研究開発実施に関する体制の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 4年間を見通した研究計画及び運営指導委員会、研究組織の編成</li> <li>② 保護者・地域との連携のため、周知、広報活動の展開</li> <li>③ 運営指導委員会による評価を実施し、第二年次の計画を作成</li> <li>④ 町立保育園から幼保連携型認定こども園への移行を見据えた、新たな幼児教育課程についての検討</li> </ul>
第二年次	<p>(1) 新設教科「地域創造学」の新設</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 小中高12年間の系統的教育課程の実施と修正</li> <li>② 育成したい資質・能力を、現在の学校や地域の抱える課題と照らし合わせて再度明確化</li> <li>③ 新設教科の実践及び検証</li> <li>④ 新設教科と既存教科との関連を確認</li> <li>⑤ 新設教科の目標の修正</li> <li>⑥ 新設教科の評価規準作成と評価方法の研究</li> <li>⑦ 学習指導要領解説地域創造学編の執筆開始</li> </ul> <p>(2) 小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 小中高12年間の実践交流と共通理解</li> <li>② 新設教科と既存の教科の関係性をより明確にするための分析</li> <li>③ 育成したい資質・能力の育成に向けて、児童生徒が意欲的に授業に取り組む指導方法の工夫・改善</li> <li>④ 授業実践を通じた教材の開発と検証</li> </ul> <p>(3) 社会的実践力の把握と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査</li> <li>② 各種調査（全国学力・学習状況調査等）との関連についての分析・評価及び次年度の評価準備運営指導委員の指導を受けながら、社会的実践力を継続的に見取っていくための教育達成測定項目の作成に着手した。</li> </ul> <p>(4) 研究開発実施に関する体制の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 運営指導委員会による評価をもとにした第二年次のまとめと第三年次の計画</li> </ul>

	<p>作成</p> <p>② 保護者・地域との連携のための周知、広報活動等の展開</p> <p>③ 町立保育園から幼保連携型認定こども園への移行を見据えた、新たな幼児教育課程についての検討</p>
第三年次	<p>(1) 新設教科「地域創造学」の実施と改善</p> <p>① 小中高12年間の系統的教育課程の実施と修正</p> <p>② 新設教科の評価規準と評価方法の修正</p> <p>(2) 小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施</p> <p>① 小中高12年間の実践交流と研究協議</p> <p>② 新設教科と既存の教科の関係性についての分析・探究</p> <p>③ 育成したい資質・能力の育成に向けて、意欲的に授業に取り組みせる指導方法の工夫・改善</p> <p>④ 授業実践を通じた教材の開発と改善</p> <p>(3) 社会的実践力の把握と分析</p> <p>① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査</p> <p>② 各種調査（全国学力・学習状況調査や心理尺度等）との関連についての分析・評価及び、次年度の評価準備</p> <p>(4) 研究開発実施に関する体制の整備</p> <p>① 運営指導委員会による評価をもとにした第三年次のまとめと第四年次の計画作成</p> <p>② 保護者・地域との連携のため、周知、広報活動等の展開</p> <p>③ 町立保育園から幼保連携型認定こども園への移行を見据えた、新たな幼児教育課程についての検討</p>
第四年次	<p>(1) 新設教科「地域創造学」の本格実施</p> <p>① 小中高12年間の系統的教育課程の実施と検証</p> <p>② 新設教科の評価規準と評価方法の実施と検証</p> <p>③ 新設教科「地域創造学」の教科書作成作業への着手</p> <p>(2) 小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施</p> <p>① 小中高12年間の実践交流と研究協議</p> <p>② 新設教科と既存の教科の関係性についての分析・探究</p> <p>③ 育成したい資質・能力の育成に向けて、意欲的に授業に取り組みせる指導方法の工夫・改善</p> <p>④ 授業実践を通じた教材の開発と改善</p> <p>⑤ 児童生徒が校種や学校をまたいで交流できる取組の実施</p> <p>⑥ 研究のまとめ（成果と課題）を学校公開研究発表会の実施により公開し、研究成果を次年度へ還元する方策の提示</p> <p>(3) 社会的実践力の把握と分析</p> <p>① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査</p> <p>② 各種調査（全国学力・学習状況調査や心理尺度等）との関連についての分析・評価</p> <p>(4) 研究開発実施に関する体制の整備</p> <p>① 運営指導委員会による評価をもとにした第四年次のまとめ</p> <p>② 幼保連携型認定こども園への移行を見据えた、「地域創造学」とのつながりに配慮した新たな幼児教育課程についての検討</p>
第五年次	<p>(1) 新設教科「地域創造学」の実施と改善</p> <p>① 小中高12年間の系統的教育課程の実施と検証</p> <p>② 新設教科の評価規準と評価方法の実施と検証</p> <p>③ 新設教科「地域創造学」の教科書（試案）作成</p> <p>(2) 小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施</p> <p>① 小中高12年間の実践交流と研究協議</p> <p>② 授業実践を基にした新設教科「地域創造学」と既存の教科の関係性についての分析・探究</p> <p>③ 社会的実践力の育成に向けて、主体的かつ意欲的に授業に取り組みせる指導方法の工夫・改善</p> <p>④ 授業実践を通じた教材の開発と改善</p> <p>⑤ 児童生徒が校種や学校をまたいで交流できる取組の実施・改善</p> <p>⑥ 研究のまとめ（成果と課題）を学校公開研究発表会の実施により公開し、研究成果を次年度へ還元する方策の提示</p>

	<p>(3) 社会的実践力の把握と分析</p> <p>① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査</p> <p>② 各種調査（全国学力・学習状況調査や心理尺度等）との関連についての分析・評価</p> <p>(4) 研究開発実施に関する体制の整備</p> <p>① 運営指導委員会による評価をもとにした第五年次のまとめ</p> <p>② 幼保連携型認定こども園への移行を見据えた、「地域創造学」とのつながりに配慮した新たな幼児教育課程についての検討</p>
--	--

(2) 評価に関する取組

	評価方法等
第一年次	<p>(1) 研究開発委員会と運営指導委員会（年3回）の開催</p> <p>① 4年間の研究について具体的内容や方向性の決定</p> <p>② 第一年次の実践研究についての学術的評価</p> <p>(2) 児童生徒の実態把握を行い、変容等の研究成果を確かめる評価の在り方を検討</p> <p>① 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の実施</p> <p>② 心理尺度、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価と分析の方向性について検討</p> <p>③ 全国学力・学習状況調査（4月）、岩手県小・中学校学習定着度状況調査（10月）、岩手県中学1年生英語確認調査（CAN-DOテスト）（1月）、岩手県中学校新入生学習状況調査（4月）、岩手県高等学校1年・2年基礎力確認調査（4月）を、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点から分析し、評価計画を作成</p> <p>④ 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査による社会的実践力の把握と分析</p> <p>⑤ 県立住田高等学校の卒業生に対する進学・就職状況、社会的実践力に関するアンケート等の追跡調査</p> <p>(3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流と、成果・課題の明確化</p> <p>① 小・中・高等学校教員が参加する全体会を5月、7月、1月、2月に開催</p>
第二年次	<p>(1) 運営指導委員会（年3回）の開催</p> <p>第二年次及び2年間の実践研究についての指導・助言</p> <p>(2) 児童生徒の実態把握を行い、変容等の研究成果を確かめる評価の在り方を検討</p> <p>① 全国学力・学習状況調査（4月）、岩手県小・中学校学習定着度状況調査（10月）、岩手県中学1年生英語確認調査（CAN-DOテスト）（1月）、岩手県中学校新入生学習状況調査（4月）、岩手県高等学校1年・2年基礎力確認調査（4月）を、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点から分析し、評価計画を作成</p> <p>② 教育達成測定、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価と分析の方向性について検討</p> <p>③ 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方についての協議</p> <p>(3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流と、成果・課題の明確化</p> <p>① 小・中・高等学校教員が参加する全体会を、5月、7月、1月、2月に開催</p> <p>② 本研究の成果と課題についての評価を適切に推進できるよう改編した研究所の組織により、学校カリキュラム、地域創造学の評価や指導の在り方等を検討</p>
第三年次	<p>(1) 運営指導委員会（年3回）の開催</p> <p>① 第三年次及び3年間の研究についての指導・助言</p> <p>(2) 第二年次の評価を基に実践的研究を行い、児童生徒の変容等を評価</p> <p>① 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の実施</p> <p>② 教育達成測定、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価の実施</p> <p>③ 全国学力・学習状況調査、岩手県小・中学校学習定着度状況調査、岩手県中学1年生英語確認調査（CAN-DOテスト）、岩手県中学校新入生学習状況調査、岩手県高等学校1年・2年基礎力確認調査による、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点からの分析、評価</p> <p>④ 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査による社会的実践力の把握と分析</p> <p>⑤ 県立住田高等学校の卒業生に対する進学・就職状況、社会的実践力に関するアンケート等の追跡調査の実施</p> <p>(3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流</p>

	と、成果・課題の明確化 ① 小・中・高等学校教員が参加する全体会を5月、7月、1月、2月に開催
第四年次	(1) 運営指導委員会（年3回）の開催 ① 第四年次及び4年間の研究についての指導・助言を受けた研究成果のまとめ ② 今後の教育課程についての検討 (2) 第三年次の評価を基に実践的研究を行い、児童生徒の変容等の評価 ① 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の実施 ② 教育達成測定、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価の実施 ③ 全国学力・学習状況調査、岩手県小・中学校学習定着度状況調査、岩手県中学1年生英語確認調査（CAN-DOテスト）、岩手県中学校新入生学習状況調査、岩手県高等学校1年・2年基礎力確認調査を、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点からの分析、評価 ④ 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査による社会的実践力の把握と分析 ⑤ 県立住田高等学校の卒業生に対する進学・就職状況、社会的実践力に関するアンケート等の追跡調査の実施 (3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流と、成果・課題の明確化 (4) 小・中・高等学校教員が参加する全体会を5月、2月に開催
第五年次	(1) 運営指導委員会（年3回）の開催 ① 第五年次及び5年間の研究についての指導・助言を受けた研究成果のまとめ ② 社会的実践力を育むことを目的とした授業公開研究会を開催 ③ 第五年次以降の教育課程についての検討 (2) 第四年次の評価を基に実践的研究を行い、児童生徒の変容等の評価 ① 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の実施 ② 教育達成測定、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価の実施 ③ 全国学力・学習状況調査、岩手県小・中学校学習定着度状況調査、岩手県中学1年生英語確認調査（CAN-DOテスト）、岩手県中学校新入生学習状況調査、岩手県高等学校1年・2年基礎力確認調査を、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点から分析、評価 ④ 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査による社会的実践力の把握と分析 ⑤ 県立住田高等学校の卒業生に対する進学・就職状況、社会的実践力に関するアンケート等の追跡調査の実施 (3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流と、成果・課題の明確化 (4) 小・中・高等学校教員が参加する全体会を5月・2月に、教職員研修会を7月に開催

#### 4 研究開発の内容

##### (1) 教育課程の内容

##### ① 社会的実践力について

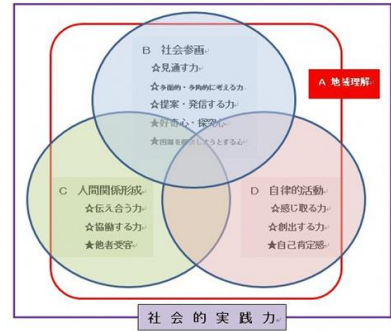
本研究においては、育成を目指す「社会的実践力」を以下のように定義した。

##### 【社会的実践力】

児童生徒が変化の激しい社会において、充実した人生を実現するために、豊かな心を持ち、主体的に未来社会を創造していくことができる力

我々が育成を目指す社会的実践力は、地域資源を学習材として横断的で探究的な学習活動が展開されることにより培われていくものである。研究開発指定2年目（平成30年度）は新設教科「地域創造学」の指導を開始し、授業実践を基に、社会的実践力として形作られていく様々な資質・能力に関わるさらなる検討を重ね、最終的に、12の資質・能力として規定した。これらの12の資質・能力は、「地域創造学においては何を理解して何ができるようになるか」という知識・技能に相当するもの、汎用的スキルに相当するもの、態度・意欲・学びの価値に相当するものに明確化し、知識・技能に相当する資質・能力を「地域理解」、これ以外の11の資質・

【図4-1】12の資質・能力の関連



能力を「社会参画に関する資質・能力」、「人間関係形成に関する資質・能力」、「自律的活動に関する資質・能力」という大きく三つの側面から分類した。「地域理解」以外の11の資質・能力については、汎用的スキルに相当するもの（☆で表示）として七つの資質・能力を位置付け、態度・意欲・学びの価値に相当するもの（★で表示）として四つの資質・能力探究を位置付けた。

併せて、地域創造学において育成を目指す社会的実践力は、それぞれ独立して育成されるものではなく、地域理解の資質・能力と相互に関連付けられ、重なり合いながら育成される資質・能力として定義し、地域創造学で育む社会的実践力を形成している資質・能力の関連を【図4-1】のように示した。【表4-1】は、社会的実践力を構成する資質・能力の分類とともに、12の資質・能力のそれぞれについて、具体的に示したものである。

【表4-1】社会的実践力を構成する資質・能力の分類

【社会的実践力】児童生徒が変化の激しい社会において、充実した人生を築くために、豊かな心をもち、主体的に未来社会を創造していくことができる力

☆ 汎用的スキル    ★ 態度・意欲・学びの価値

A 地域理解	自分たちの地域の歴史や文化、現状や抱えている課題、活用資源を理解し、ふるさとに愛着をもちながら町の発展・創造に関わる自分の役割等を捉える。	
B 社会参画に関する資質・能力	1 ☆ 共通力	【☆見】自分や集団にとっての課題や問題を発見し、その解決方法を思いだす問題発見力。情報を適切に活用する力。目標の達成に向かって解決の道筋を見通し計画する力。
	2 ☆ 多面的・多角的に考える力	【☆多】課題を明確にしたがら様々な見方や考え方で検討する力。批判的思考力。考えや取組の妥当性を考える力。予測・判断する力。
	3 ☆ 提案・発信する力	【☆提】地域への愛着を持ち、よりよい社会づくりに向けた取組を提案する力。解決策や考えたことについて効果的な発信方法を考える力。新しい視点や価値観を生み出す力。
	4 ★ 好奇心・探究心	【★好】身の回りや地域の事象に興味関心を持つ態度。もつと知りたいたいと思う。知りたいたいことや解決したいことをみつけようとする姿勢。
	5 ★ 困難を解決しようとする心	【★解】失敗してもあきらめずに挑戦しようとする心。集団の仲間とともに困難な場面を直視しても粘り強く取り組み、最後までやり遂げようとする姿勢。
C 人間関係形成に関する資質・能力	1 ☆ 伝え合う力	【☆伝】聞けたことや自分の考えを伝える力。複眼的に伝え方を工夫する力。気持ちや感じたことを伝える力。双方向的に伝え合う力。
	2 ☆ 協働する力	【☆協】目標達成に向かって、他者と協力して活動できる力。継続し合ったり、集団活動を統制したりする力。
	3 ★ 他者受容	【★受】多様な他者の考えや価値観、立場を受け入れる態度。相手を尊重したり敬意を抱いたりする心。
D 自律的活動に関する資質・能力	1 ☆ 感じ取る力	【☆感】自己の現在の姿をみつめる力。考えや意思、思いを自分自身で捉えたり、捉え直したりして、これからの自分の学びや活動をよりよいものに調整しようとする力。
	2 ☆ 創出する力	【☆創】出さぬがともの「こと」に触れて面白さや楽しさ、よさを感じ、自分なりに表現する力。新しい表現の仕方を生み出したりする力。
	3 ★ 自己肯定感	【★自】学びの過程や活動を省察したり、最後までやり遂げた達成感を味わったりしながら自分のよさを捉える。自分の可能性を前向きに受け止め、より高いもの、よりよいものを目指して取り組もうとする態度。

② 社会的実践力の系統表を基にした滑らかな学びの接続について

地域創造学の特性を生かし、教科横断的な視点から、校種間、異校種間の接続を図ることにより、着実に社会的実践力が育まれていくよう、発達段階を保育園の年長児も含めた五つのステージのまとまりで編成した。さらに、12年間をとおして、町全体で目指す子どもたちの育ちの姿を俯瞰しながら、地域創造学で育てたい資質・能力の確実な育成に向け、本研究開発の根幹となる社会的実践力の系統表を作成し、五つのステージにおける社会的実践力について、その系統性を明らかにした。

③ 地域資源を学習材とした系統的な学びの在り方について

【地域創造学の目標】

住田町及び近郊地域社会をフィールドにした横断的・総合的な学習を、探究的な学習活動を意図的・計画的に行うことを通して、新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力を身に付けた心豊かな人材を育成することを目指す。

上記の目標にもある通り、地域創造学においては住田町及び近郊地域社会に溢れる地域資源を学習材にして、小・中・高の児童生徒が、探究的な学習活動を意図的・計画的に行っていく。

④ 単元計画及び学習指導要領解説地域創造学編について

研究開発指定3年目（令和元年度）から、小学校から高等学校までの全ての校種が、社会的実践力の系統表を基に作成した単元計画及び学習指導要領解説地域創造学編に基づいて授業を進めている。特に、小・中学校における単元計画では、それぞれの学年に「共通単元」を設定し、2つの小学校の児童・生徒同士の交流場面の創出にも取り組みながら実践を重ねている。

⑤ 地域創造学で育む社会的実践力と各教科等で育む資質・能力の関連について

地域創造学で育む社会的実践力を支える資質・能力のうち、「B 社会参画に関わる資質・能力」、「C 人間関係形成に関わる資質・能力」「D 自律的活動に関わる資質・能力」の11の資質・能力（汎用的スキル及び態度・意欲・学びの価値）は、各教科等においても育まれる関連能力である。そのため、地域創造学を中核として育成しつつも、各教科等の学習においても関連性を捉えながら培っていく。



## (2) 地域創造学の学習指導について

### ① 探究のプロセスの往還を意識した指導方法の在り方について

本町においては、学習活動をとおして資質・能力を育成できるよう、これまでの研究実践において、子どもたちにとってよりよい探究のプロセスを探ってきた。町内の児童生徒の探究活動の実態を基に、収集した情報や体験活動等から得た知識や考えを具体的に整理したり、分析・考察したりする過程を一層重視する必要があると判断したことから、研究指定2年目（平成30年度）から、試案として「①課題の設定、②情報の収集、③アイデアの拡散と収束、④アイデアの具現化、⑤改善、⑥まとめと振り返り」という六つのプロセスを設定し、児童生徒の探究活動が質的に深まっていくよう、発展的に繰り返される「探究的な学習過程」を重視した学習を展開した【表4-3】。また、各プロセスでの児童生徒の学びの姿を具体的に挙げて、全教職員で児童生徒の探究的な学習活動での学びの様相を共通理解できるようにした。

【表4-3】平成30年度の実践において活用した地域創造学における基本の探究のプロセス

① 問題の理解	② 情報収集	③ アイディアの拡散と収束	④ アイディアの具現化	⑤ 改善	⑥ まとめと振り返り
<ul style="list-style-type: none"> <li>・見る、聴く</li> <li>・理由や根拠を問う</li> <li>・気づく</li> <li>・共感する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調べる</li> <li>・整理する</li> <li>・分析する</li> <li>・課題を焦点化する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・解決案を発想する</li> <li>・解決策を組み立てる</li> <li>・解決策を見なおす</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・解決策の実施計画を構想する</li> <li>・解決策を実践する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実践を対象の立場から問い直す</li> <li>・実践に不足していることを付け加える</li> <li>・実践を修正してやり直す</li> <li>・実践を繰り返す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実践の成果と課題をまとめて発表する</li> <li>・実践後の自分の思いや願いを伝える</li> <li>・学びの意味や価値を表現する</li> </ul>

平成30年度の実践の結果、一般的な探究のプロセスは、「問題の理解」をスタートとし、「課題設定」、「情報収集」と進んでいくことが多いが、プロセスはいつでも一方向とは限らず、時に「実施・改善」と「見通しを持つ」のプロセスが往還されたり、「問題の理解」からではない段階が起点となって学びが始まったりすることが明らかになった。そこで、令和元年度からは、新たに本町における探究の六つのプロセスを設定し、実践を進めている【図4-2】。児童・生徒の学習状況に応じてプロセスを柔軟に往還させることも、地域創造学の特徴の一つであるといえる。

【図4-2】本町における探究の六つのプロセス



### ② 探究方法の系統化について

地域創造学においては、探究方法に関しても12年間を見通した系統的な視点を大切にしている。基本的には、第1～第2ステージでは、「地域のおよさや魅力（自然、文化、歴史、産業等）」を体感的に理解してそれらをまとめ、発信していくことから始まり、第3～第4ステージからは第1～第2ステージでの「地域理解」を土台としながら「地域の課題」に目を向けた自分なりの「解決方法の提案」等を行い、最終段階である第5ステージにおいては、より実現可能性を意識した、地域活性化に関わる「プロジェクト実践や町への提言」等を行うという流れで学習を進めていく。ただし、これはあくまで基本的な流れであり、このような一方向的な流れにとらわれず、児童生徒の探究活動の深まりに応じて、例えば第2ステージで「地域の課題」に目を向けたり、第4ステージで「町への提言」等を行ったりすることもできるなど、柔軟に指導計画の見直しを行っていけることも、地域創造学の特徴の一つである。

### (3) 地域創造学の評価について

評価の方法及び工夫については、5 研究開発の実際で詳述する。

## 5 研究開発の実際

### (1) 社会的実践力の系統表等を基にした授業実践について

令和元年度から、社会的実践力の系統表及び年間指導計画、学習指導要領解説に基づいて、小・中・高5校が育成を目指す資質・能力、指導方法、評価方法等を共有し、12年間の系統性を意識した授業実践を行った。手探りの中で研究を進めていく事は容易なことではなかったが、それぞれの学校で開催する授業研究会に他校の教員が参加する授業研究会の相互交流なども年間15回程度実施して、指導方法や評価方法等について、議論を重ねながら、よりよい地域創造学の学びの在り方の追究を進めた。研究会では、「社会的実践力の系統表に基づいて各ステージでどのような力をどこまで育成して次のステージへつなげていくべきなのか」、「これまでは自分の校種における指導のことしか考えてこなかったが、地域創造学においては、これまでの校種でどのようなことを学んできたのかという視点で系統性を考えて授業づくりをしていく視点が大切だと感じた」など、校種を越えた視点で指導計画や指導内容について発言する場面が多くみられた。

### (2) 社会参画の資質・能力を育んでいく系統的な取組について（児童生徒の実践から）

これまでの約2年半においても、各ステージの段階における「社会参画」に関わる多くの実践が見られた。

#### ① 【R1 世田米小学校第6学年 単元名「考えよう 私たちの未来」より】

第3ステージにおける、住田町の「町づくりの取組」を題材とした実践例である。

#### ② 【R1 世田米中学校第3学年 単元名「プロジェクト実現に向けて行動しよう！」】

○プロジェクト名「住田の食材を生かして給食献立をつくろう」】

世田米中学校3年生2名は、住田の食材を生かして給食献立をつくるプロジェクトに取り組んだ実践例である。

#### ③ 【R2 住田高校第2学年 単元名「地域への貢献を考える」】

○プロジェクト名「外国人も暮らしやすい町に」

第5ステージの生徒が、自らの海外研修での経験や、他校生徒のプロジェクトとの交流から、気仙地域の外国人の暮らしやすさに着目してプロジェクトを進めた実践例である。

上記の3つの実践に関しては、実施報告書（本文）で詳述する。

### (3) 学習評価について

#### ① パフォーマンス評価について

地域創造学を本格実施してからのこれまでの2年半においては、評価検証部会の取組を基に、各学校で地域創造学における評価方法の一つである、パフォーマンス評価の実践を積み上げた。その中から、中学校の単元におけるパフォーマンス評価の事例及び評価改善に係る取組を紹介する。

○単元名 中学校第1学年「住田に地域貢献している人や資源について調べよう！」

まず、この単元の内容及び社会的実践力の系統表を基に、具体的な生徒の学習過程を想定しながら評価の観点や評価規準の設定を行い、それを土台として、パフォーマンス課題及びルーブリックを設定した。単元終了後、生徒のアンカー作品や設定したパフォーマンス課題及びルーブリックに基づいて複数の教師で評価を行った上で、評価の視点のすり合わせを行い、さらに次年度に向けてのルーブリックの見直しを行うため、次のような実践（検討会）を行った。

#### ☆ 中学校の実践

「パフォーマンス課題：住田町に貢献している人・資源を発信するための計画を立案する。」  
について



### 【1】教師個人による作品の評価

- ・ルーブリックに基づき教師が個人で生徒の作品を評価する。
- ・ルーブリックを確認する。
- ・ルーブリックに基づいて、生徒の作品をA、B、（あればC）と評価する。  
その際に、評価した理由を記述する。

### 【2】複数の教師による評価の視点すり合わせ

- ・教師が個人で評価したものを他の教員と共有し、相違点を確認する。
- ・差異がある場合は、評価をどちらにすれば良いのか話し合い合意形成を図る。
- ・周囲の先生と「評価した結果」や「その理由」について共有を図る。
- ・周囲の先生と「評価した結果」が同じであれば、その子どもの評価は確定。
- ・周囲の先生と「評価した結果」が異なれば、周囲の先生と話し合い、評価を確定させる。その際に、評価を確定させた理由付けを明確にする。

### 【3】評価のためのルーブリック修正

#### 【2】の内容を踏まえ、次年度に向けたルーブリックの修正を図る。

- ・周囲の先生と「評価した結果」が異なっていたということは、「当初、設定したルーブリックの評価基準に改善の余地があること」を意味している。「評価を確定させた理由付け」を踏まえて、次年度に向けたルーブリックの修正を図る。
- ・ルーブリックの修正を図った後、A、Bそれぞれの評価となった作品をアンカー作品（モデル）として記録に残す。

検討会前後のルーブリックに関しては、実施報告書（本文）で詳述する。このような実践を通して、児童生徒の実態等に基づいて、随時パフォーマンス課題やルーブリック等の修正を図っていくことが大切であることが明らかになった。

## ② ポートフォリオ評価について

町内の小・中・高が共通してポートフォリオ（学びのあしあと）を活用している。ワーキング・ポートフォリオ（青色ファイル）とパーマナント・ポートフォリオ（黄色ファイル）の二つのポートフォリオを使い分け、ワーキング・ポートフォリオには一年間の学びを蓄積し、パーマナント・ポートフォリオはそこから精査して残していく資料を12年間つないでいくために活用している。ワーキング・ポートフォリオに関しては、探究のプロセスの中で児童生徒自身が、自分が得た情報や学習内容を整理しながら集積し、単元末や年度末等の場面で、自分の学習を自覚的に振り返るツールとして活用することが各ステージ段階で定着してきている。また、パーマナント・ポートフォリオに関しても、例えば中学校1年生の生徒が、小学校6年生の時に蓄積した資料を活用して探究テーマを設定する等、ステージ間の学びをつないでいくツールとしての有効性を示す事例も多く見られるようになってきている。

## ③ 教育達成測定について

児童生徒の学習の変容や、学習への達成感をとらえる一手法として開発・実施した教育達成測定の分析結果に関しては、自己評価書及び実施報告書（本文）に詳述する。

## 6 研究開発の成果

### (1) 実施による効果

#### ① 児童生徒への効果

社会的実践力の系統表や単元計画、指導要領解説に基づいた地域創造学の本格的な授業実践から2年半が経過し、授業に取り組んできた児童生徒にも、たくさんの成果がみられるようになってきた。令和3年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査の「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」の質問に肯定回答する生徒（中学校3年生）の割合は肯定回答は、同一集団である平成30年度（小学6年生）の肯定回答から、23.5ポイント

の伸びが見られた。今後も、身近な地域社会というフィールドで、探究のプロセスを幾度も往還し、日々自身の活動を振り返りながら一步步成長していく児童生徒の変容を、教師が見とり、価値づけ、適切に支援していくことが求められる。

## ② 教師への効果

授業研究会の相互交流や各部会での協議等を通して、社会的実践力の系統表に基づいてどのような力をどこまで育成して次のステージへつなげていくべきなのかなど校種を越えた12年間の学びという視点で指導や評価の在り方についての協議を行うことが恒常化してきた。地域創造学に係る教職員アンケートにおいても、「教師は先導ではなく、伴走であることを学んでいる。どの教科、指導でも同じことが言えると思うので、伴走であっても、子どもたちの想いを盛り上げていける指導力を身に付けていきたい。」等の記述回答が複数見られ、地域創造学の指導実践が、日常の授業改善に繋がっていることが窺える。

## ③ 保護者等への効果

令和2年度末に実施した小・中・高の保護者及びゲストティーチャー等の地域協力者向けの地域創造学に係る記述式アンケートを実施した。「地域創造学は児童生徒の成長にとって有意義だと思うか？」という項目に関しては、保護者、地域協力者、共に肯定的な回答の割合が高く、その理由としては、「主体的に行動したり、物事を考えたり、学びの方法、幅を広げるきっかけとなるから」、「地域のことを学ぶことで郷土愛の形成に繋がると思うから」などの回答が得られた。また、「地域創造学に期待したいこと」の項目における記述内容としては、「困難なことに遭遇した時に、諦めずに皆と力を合わせて乗り越えていけるような力を身につけてほしい」、「大人にとってもいい学びを生むと思うので、地域全体で子どもたちの活動をもっと応援していく取組になっていくことを期待する」等の回答が得られた。全体的には肯定的な回答が多かったが、本当の意味で「地域創造学はどのような学びなのか」ということを理解した上での肯定的な回答なのかということが多面的・多角的に分析しながら、地域全体の共通理解を図るための手立て等をさらに工夫していく必要がある。

## (2) 実施上の問題点と今後の課題

### ① カリキュラム全体の不断の見直しについて

社会的実践力の系統表、学習指導要領解説、単元計画等を含むこれまでに開発してきたカリキュラム全体に関して、児童生徒や地域、保護者、教職員の実態等を踏まえ、適宜見直しを図っていく。そのための手立てとして、教育達成測定や、保護者・地域協力者・教職員アンケート等の回答結果に関して、小・中・高の教員が集まり、これまでの取組や児童生徒の変容等を振り返りながら分析していく評価機会を明確に設定していく。

### ② 評価の在り方について

地域創造学の探究活動においては「探究の六つのプロセス」を大切にしているが、生徒が自身のプロジェクトを実現する過程で、どのようなプロセスの中で、どのようなことに困難さを抱き、どのように乗り越え、社会的実践力に関わる変容や実践に最終的に結びついていったのか、そして教師はそれぞれのプロセスでどのような指導・支援を大切にしたことが社会的実践力を育成していく上で効果的だったのかということに関しては、十分に検証できていない課題であると捉えている。このことを解決していくためには、各単元及び年度末等における「振り返り」の時間を計画に明確に位置付けた上で、児童生徒に、自身の探究のプロセスを自覚的に振り返らせることを大切にしていくことが求められる。

### ③ 持続可能なプログラムの構築について

今後も持続可能なプログラムにしていくために、これまでの取組が生徒や地域や保護者にとって本当に効果的なものになっているか、指導する教員にとって無理のないものになっていないかなどの検証を行い、取組の内容を精選していくことが求められる。

## 小学校 教育課程表（令和3年度）

	各教科の授業時数										特別の教科 道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	地域創造学	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語						
第1学年	306		136		0 (-102)	68	68		102		30 (-4)			34	106	850
第2学年	315		175		0 (-105)	70	70		105		30 (-5)			35	110	910
第3学年	245	70	175	90		60	60		105		30 (-5)	25 (-10)	0 (-70)	35	85	980
第4学年	245	90	175	105		60	60		105		30 (-5)	25 (-10)	0 (-70)	35	85	1015
第5学年	175	100	175	105		50	50	60	90	60 (-10)	30 (-5)		0 (-70)	35	85	1015
第6学年	175	105	175	105		50	50	55	90	60 (-10)	30 (-5)		0 (-70)	35	85	1015
計	1461	365	1011	405	0	358	358	115	597	120	180	50	0	209	556	5785

中学校 教育課程表（令和3年度）

	各教科の授業時数										総合的な学習の時間	特別活動	地域創造学	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	英語	特別な教科 道徳				
第1学年	140	105	140	105	45	45	105	70	133 (-7)	30 (-5)	0 (-50)	35	62	1015
第2学年	140	105	105	140	35	35	105	70	133 (-7)	30 (-5)	0 (-70)	35	82	1015
第3学年	105	140	140	140	35	35	105	35	133 (-7)	30 (-5)	0 (-70)	35	82	1015
計	385	350	385	385	115	115	315	175	399	90	0	105	226	3045

## 住田高等学校 教育課程表（令和3年度）

教科	科目	学年 標準 単位数	1年			2年		3年		備考
			共通 29単位	共通 20単位	選択 9単位	共通 15単位	選択 14単位			
国語	国語総合	4	⑤							
	国語表現	3					▲3			
	現代文B	4		3		3			分割履修(2・3年)	
	古典B	4		2		2			分割履修(2・3年)	
地理 歴史	世界史A	2		②						
	日本史B	4		②		③				
公民	現代社会	2	②							
	政治・経済	2					●6	2		
数学	数学Ⅰ	3	③							
	数学Ⅱ	4		4						
	数学Ⅲ	5						●6		
	数学A	2	2							
	数学B	2			▲3					
	数学探求	4						4	学校設定科目	
	実用数学	2					2	●6	学校設定科目	
理科	科学と人間生活	2	②							
	化学基礎	2			③	△4		▲3		
	化学	4			1			△3	分割履修(2・3年) 基礎履修後に履修	
	生物基礎	2			③	△4		▲3		
	生物	4			1			△3	分割履修(2・3年) 基礎履修後に履修	
保健 体育	体育	7~8	③	②			③			
	保健	2	①	①					分割履修(1~3年) 分割履修(1・2年)	
芸術	音楽Ⅰ	2	②							
	音楽Ⅱ	2				◇2				
	音楽Ⅲ	2						◇2	継続選択(2・3年)	
	書道Ⅰ	2				◇2				
	書道Ⅱ	2						◇2		
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	③							
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		4						
	コミュニケーション英語Ⅲ	4					4			
	英語表現Ⅰ	2	2							
	英語表現Ⅱ	4				◇2		◇2	分割履修(2・3年)	
家庭	家庭基礎	2	②							
情報	社会と情報	2	②							
地域創造学	地域創造学	1~3	1		1			1	研究開発学校による学校設定教科	
共通教科・科目の単位数の計			30		27・30			23・30		
商業	ビジネス基礎	2~6						▲3		
	情報処理	2~6			▲3					
家庭	フードデザイン	2~8						4		
専門教科・科目の単位数の計			0		0・3			0・7		
ホームルーム活動			1		1			1		
総合的な探究の時間									研究開発学校による学校設定教科で代替	
合計			31		31			31		
備考			※ 昨年度において▲3数学Bを選択した生徒は、3年で●6(政治・経済と数学探求または数学Ⅲ)を履修する。 ※ 昨年度において▲3情報処理を選択した生徒は、3年で●6実用数学とフードデザインを履修する。 ※ 3年において▲3理科の基礎科目を選択する生徒は、2年で選択していない科目を履修する。							





#### 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1				6			1		
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		10						

- 1 学校名 住田町立世田米中学校（スミタチョウリツセタマイチュウガッコウ）  
校長名 及川 賢一（オイカワ ケンイチ）

- 2 所在地 岩手県気仙郡住田町世田米字大崎 72-1  
電話番号 0192-46-3155  
F A X 番号 0192-46-3156

#### 3 課程・学科・学年別幼児・児童生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
21	1	21	1	18	1	60	3
		病1	1			1	病1

#### 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1				8		1			
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		12						

- 1 学校名 住田町立有住中学校（スミタチョウリツアリスチュウガッコウ）  
校長名 岩角 聖孝（イワカド セイコウ）

- 2 所在地 岩手県気仙郡住田町上有住字櫃割 12-1  
電話番号 0192-48-2020  
F A X 番号 0192-48-2011

#### 3 課程・学科・学年別幼児・児童生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
13	1	8	1	4	1	25	3
情1	1	知1	1			2	情1、知1

#### 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1				8		1			1
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		13						

1 学校名 岩手県立住田高等学校（イワテケンリツスミタコウトウガッコウ）  
校長名 小山 秀司（オヤマ シュウジ）

2 所在地 岩手県気仙郡住田町世田米字川口 12-1

電話番号 0192-46-3141

F A X 番号 0192-46-3144

#### 3 課程・学科・学年別生徒数、学級数

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	普通科	37	1	26	1	32	1	95	3
	計	37	1	26	1	32	1	95	3
計		37	1	26	1	32	1	95	3

#### 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1				10		1			2
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
		2		17						